

尚絅子育て研究センター

児やらい

koyarai vol.10 2013

Child-rearing to generate mutual recognition
Child Studies Center at Shokei

第10巻 2013年



目 次

はじめに
『児やらい』の意義

I 研究論文

- 1 保育者養成校における学生たちの調べる力や
コミュニケーション能力を育てる演習授業のあり方
緒方 宏明・白樫 静枝・和田 玲子
- 2 保育者効力感と課題先延ばし、希望職業および自己評価との関連
～ 保育内容研究Ⅳ「言葉B」の授業実践からの一考察 ～
小川内 哲生
- 3 光を素材とした子どもの造形活動における可能性
坂本 健
- 4 「子守り学校」から「保育所」へ
—近代日本における乳児保育実践の生成—
塩崎 美穂

II 公開シンポジウム記録

- 1 第12回公開シンポジウム
「子育て・子育ての中にある“つながり”」
—子どもの育ちから地域社会の創造へ— 企画趣旨
- 2 シンポジストプロフィール
- 3 報告
「おもいで」編集の実践から
—自分らしさのよりどころとして保育をデザインする—
堂森 宏一
地域の保護者支援の充実
—公立保育園の民営化を通して考えた保護者支援のカタチ—
深谷 恵了
河内からたち保育園の実践
初瀬 基樹
- 4 これまでに開催された公開シンポジウム

はじめに

尚綱大学短期大学部子育て研究センターは、平成 12（2000）年 6 月、短期大学部の研究機関として設置され、幼児教育学科の研究員を中心に活動が展開されてきた。それは、異なる分野の研究者同士が子育て・子育ちについての調査や研究を領域横断的に行うことを通して、地域社会への貢献を目指す活動でもあった。また、当センターは、学生を「保育園」や「幼稚園」あるいは「福祉施設」という保育・教育・福祉現場へと送り出す保育者養成校の役割について、日々、検証を重ねる役割もあわせもつ。平成 25（2013）年の現在、我々は、設立当初からの理念を継承し、地域における＜子育て・子育ち＞や、保育者養成校における＜保育者になるための学び＞を探究し続けている。

発足から十数年を経て、これまで当該センターを牽引してきた濱崎幸夫氏の退官にともない、今年度より、わたくし塩崎が、尚綱子育て研究センター長を引き受ける役回りとなった。例年通り公開シンポジウムを開催し『児やらい』の刊行になんとかこぎつけているのは、学科長をはじめとする幼児教育学科教員の懇切丁寧なサポートのおかげであることは言うまでもない。これは、幼児教育学科が、共同研究チームとしても活躍できる職能団体であり、本短期大学部の研究基盤を耕し続ける知的資源であることの証左と言えよう。

以下、今後の見通しや課題について、議論の先取りになることは承知の上で述べておきたい。私事になるが、私は、先行世代が後発世代に^{おしきよ}教え諭し「次の世代を育成」しようとする次世代育成思想の傲慢さを再考する近代教育批判から教育学を学び始めた世代に属する。つまり、教育学の仕事の多くが教育批判についやされる知的風土のなかでしか考察の次数をあげる方法を学んでこなかったということである。そのため、先行世代の優位性が暴力に転換しやすい危うさを自覚することについての研究を、これまで、いくつか果たしてきた。私にとっての教育学研究は“教育”批判の文脈の内にある。

にもかかわらず（だからこそ）、私には、今というこの時代を共に生きるすべての世代をつなぐ「異なる世代の対話」としての＜保育・教育＞が、いつもどこかで想定されている。剥きだしになりがちな脆弱な^{いのち}生命がまもられるように思考を集中させ、他人のために配慮することを厭わない、そうした市民社会到来への願いがある。教え、諭し、啓蒙し、指導するというような一方的かつ抑圧的な人間への介入や管理を促す“教育”を再考／脱構築しつつ、^{いのち}生命をつなぐことへの謙虚な問いをこそ＜保育・教育＞のなかに生成したい。今こそ、尚綱大学には、地域に貢献する知的資源としての子育て研究センターをととのえ^{いのち}生命をつなげる努力としての活動が必要ではないだろうか。非力は承知の上ではあるが、今後も幼児教育学科、ひいては尚綱大学の研究センターとしての任を果たしていきたいと思う。多くの方々からのご理解ご協力をお願いする次第である。

平成 25（2013）年 6 月 10 日

尚綱子育て研究センター長

塩 崎 美 穂

『児やらい』発行の意義

子育て研究センターでは、平成16（2004）年から、本誌『次世代育成研究・児やらい』を刊行してきた。公開シンポジウムの報告、研究者による研究発表、現場の保育者による実践報告などを中心に本誌は編まれている。加えて、子育て研究センターのこれまでの運営体制上、幼児教育学科の学科紀要的要素も合わせもっている。

「児（こ）をやらう」とは、ある年齢以上になった子どもを「家」から「共同体」のなかに放り出し、親離れ／子離れするという意味である。日本社会でひろく実践されてきた子育て習俗の一つであり、育つ子どもと育てる大人、その双方の〈育ち〉を包括する概念である。

つまり、「児やらい」は、子どもを後ろから追って次の世界に送り出すこと、子どもの背中をおして子ども自身が自らの人生を引き受けることを促す営みである。そしてそれは、とりもなおさず、現在、〈保育=child care and education〉や〈教育=education〉と呼ばれていることの内実に他ならない。

日本語の“教育”という語は、「近代学校教育」と同義に使われることが少なくないが、学校教育としてイメージされている“教育”はinstruction、すなわち「教え諭すこと」「指導すること」「誘導すること」の意味に肥大化している。もはや日本語の“教育”は、Educationの訳語としては不適切なほど学校教育のみに集約された語感をもつ。

しかし、明治期に翻訳した際の語源であるEducationということばは、さらに本来のラテン語の意味にさかのぼれば「生きることを共に喜ぶ」という意味である。というよりむしろ、確認すべきは、Educationには、「教える」という意味はもちろん「引き出す」という意味すらないことだろう。ことば本来の意味は、Care（他者に配慮し）とCure（人を癒し励ます）とほぼ同義、すなわち教育とは「共に幸せに生きる」という意にこそ近い。明治期、Educationは「教育」と翻訳されると同時に「保育」とも訳された。いうまでもなく、「保育」の方がEducation本来の意味にニアリーイコールである（HOIKU≒Education）。

また、ラテン語を語源とする国々では、Educator（エデュケイター）とは保育者／社会教育者を指すことばである。それには、学校にいるTeacher（教師）とは異なる、「魂を吹き込む人」というほどの意味がある。生涯を通じて、人間の独立、個人の尊厳をまもるために、人々を支えてきた人を〈保育者〉Educatorと呼ぶ文化がある。

我々もまた、誤訳ともいえる「教育」の使われ方を今こそ見直し、世代をつなぐ、生命をつなぐことをたのしむことができる社会を構想したい。「児やらい」を可能にする社会構造や社会思想に敷衍した研究を、本誌『児やらい』に蓄積していくことはできないだろうか。ひきこもり百万人といわれる現在、人嫌いが瀰漫した社会を刷新し、あらたな「絆」や「居場所」づくりを意識しつつ、広く本誌を活用していただきたい。今後はより広域からの研究成果も蓄積していけるよう努力したいと思っている。